

今泉：高齢化の問題はこれぐらいにして、今後の展開に入りたいと思います。今までの話ではまちづくり系についてはほとんど自発的なのですが、施設系については受動的になってくるということでした。これを自発的なものにするには、ということについてパネリストの方のご意見をお願いします。

今村：先ほど申し上げたように病院ボランティアや高齢者施設のボランティアも実をいうと言われないと動かないところがあり、病院の担当者が困って相談に見えます。相談を受けた時にいつも聞くのは、あなたのところは地域やまちづくりに積極的に動いていますかと聞きます。ボランティアは応募してくるので自発的な部分が少し折れてしまうのはしかたないと思います。そこで自発的な部分を伸ばそう、是非頑張ってもらおうと思ったときに、先ほどのお話の①から②、③に移っていくアプローチができていくかどうかだと思います。それはどういうことかという美術館や博物館がまちづくりの資源という形になるようにアプローチしているか否か、ここがすごく大きい気がします。まず外に出て行くというアプローチや、まちづくりの企画の段階から話し合いをしているか、あるいは自発的な風を入れるような取り組みをしているかですね。まさに今泉さんのような方です。まちづくり関係の方は自発的でアイデアが豊富です。そのような方を美術館や博物館に存在しているか否か、そのようなところがキーワードになるような気がします

今泉：今の話しはわかりやすかったですね。例えば行政で言えば文化課とまちづくり課が連携してうまくやっているかということですね、そういったところが連携してうまくやっているとその雰囲気は当然みなさんに伝わって上手くやれることもあると思います。

古賀：今の話、すごく共感できますが、文化施設の中で私が①、②、③と申し上げた 1 の段階、ボランティアの方とご一緒する施設側のほうも①の段階のボランティアしか求めている場合もあると思います。例えば施設が市民に文化に触れる機会を提供するためにコンサートや公演をやることは施設の使命だと思います。でも資金や人手が足りないのをそれを滞りなくやるためにボランティアの力を借りたいと思い募集して、もぎりや駐車場整理をお手伝いしてもらいます。このとき両者が満足していればそれでいいのではないかという考えもあります。分科会で荷が重いとお答えになった 14 人の方も「まちづくりまでせないかとね」という考えだったかもしれません。そういう意味では両者のニーズが合致しているのであればそれはそれでいいのではないかと思います。ただ私個人の考えですが、文化施設は先程今村さんがおっしゃったようにまちづくりの拠点施設だと思います。文化に社会的な意味合いがあって人づくりまちづくりに貢献できるものだという話を午前中申し上げましたが、そうであれば文化がもっている力をその地域の中で活かしていくための文化施設というのは拠点であるべきだと思います。素晴らしい芸術・文化を広げていくための芸術の殿堂みたいな意味合いの存在価値ももちろんあります。そこも重要ですが、今

社会地域から求められていることはそれだけでなく多様化しています。地域の街づくりにどれだけ文化で貢献できるのか、文化施設としてどこまで力を発揮できるのかという部分が文化施設の役割として当然求められていると思います。その考え方から文化ボランティアとどうお付き合いしていくか考えるときに、施設自体が①から②、②から③、まちづくりにどう関わりどこまでやろうとしているのかというところがボランティアとのお付き合いのしかたにも如実に影響してくるという部分があります。それにもう一つ今村さんが最後に言われた、違うジャンルの専門家の導入という話もその通りと思えるところです。また分科会で今泉さんのお話をお伺いして、まちづくり系の活動にも既にアートがいろいろな形で入っていました。音楽や美術とか案山子もアートですが、このようにアートが役に立っていることを、文化に関わっている人ももっともっと取り入れていただくとか、専門家のお知恵を拝借するという機会はきっと有効だと思います。今は①の段階の活動をしている文化ボランティアも、本日の話を聞かれてやってみたいと思う方がいると思います。違うジャンルの専門家との関わりを持つということもヒントになりそうな気がしました。

今泉：ありがとうございました。文化施設はまちづくりの拠点の一つだという素晴らしいお言葉をいただきました。ジャンルの違う専門家にきてもらうという発想、①、②、③にホップステップジャンプするとき、必要なのかなという感じがします。会場の方如何がでしょうか。

戸来：いのちのたび博物館の戸来といいます。先ほど事例発表で時間が十分でなく説明できなかったのですが、いのちのたび博物館、ここは旧自然史博物館、旧歴史博物館と旧考古博物館の三つが統合されたもので博物館の中でもかなり評価の高い施設です。そういう関係もあって実は博物館は金食い虫です。かなりのお金を持ち出しています。かなり入館者が多く中でも子どもたちが多く来てくれます。

この博物館は北九州市にとって文化面での戦略施設だと認識しています。博物館もボランティア（シーダーと呼んでいます）も強く意識すべきだと思います。そのことがまわりまわって北九州の人だけでなく、かなり福岡からもお客様が見えるようになりました。だから戦略的施設と位置づけています。先ほど高齢化社会と高齢化が悪いように言われますが、実は高齢化社会というのは非常にいい社会だと思っています。文化の面で非常に熟度の高い存在ですからボランティアされる方もそのよさを十分に活かすことだと思います。そのためには特に施設系の場合は施設のよさが絶対必要です。若い人は非常に現実的ですから、施設がよければ、あるいはボランティアがよければ若い人もきます。「若い人おいで」というのではなく、その良ささえ施設やボランティアがあれば若い人はきます。

今泉：ありがとうございました。魅力があれば人は集まるのですね。また先ほど言われた市町村長の意識ということが重要ですね。まちづくりと文化を融合させていくようなトッ

プを選ばないといけませんね。その最高責任者が首相になるのでしょうか。是非そういう動きをして欲しいですね。ということで他にはございませんか？

木村：文化と経済、まちづくりのことを少し述べたいと思います。今僕が住んでいる福津市の津屋崎町は、昔塩づくりをしてそれを売ったお金でいろいろなところの文物を買ってきて、戻るとそこに品物めがけて人が集まってきたという場所でした。当然そこにはみやこ的な文化があり、人は塩を売って得た日用品や物品だけではなく、津屋崎にある文化的なものを求めてきたのだということをすごく感じています。まちづくりをするときにビジネスだけ狙っていても不毛なものでしかなくて、文化が無いところに経済は生まれにくいことは当然なのですが、やはり小さな町でも全くその通りだと思っています。先ほど博物館が文化の戦略施設だという発言がありましたが、それは多分そのまま文化を経済に置き換え、経済の戦略施設といえると思います。文化のあるところに人は集まりますし、人が集まるところに経済が生まれるというような形です。今特に郊外の町は自立したビジネスを立ち上げることは本当に難しいと思います。工場や企業を誘致したり、そうでなければ一次産業に頼っていくしかないと思います。

そこで新しい経済を産むためにやはり今までにない形のビジネスプランを立ち上げるしかなくて、そのために何が必要かというやはり人が集まる環境と文化だと思っています。事例発表でもお金お金と守銭奴のような目をして発表をしていたのですが、文化と経済というのは分かれ難く結びついており、経済を発展させるためにまず文化から取り掛かることは一つの正攻法だと思っています。

今泉：ちょうどお金の話が出てきたのでその話にいきましょうか。今の話非常に面白いですね。文化があるところに人が集まりそこに経済がうまれる。まず我々は金儲けのことを議論するのではなくて人が集まるような仕掛け、要するに自分達が先ほどいわれた様な魅力ある、「心儲け」ということでしょうか。最初は「心儲け」その結果「金儲け」がついてくるというような流れができてそうに感じますが、木村さん説明をお願いします。

木村：まちづくりの分科会でも一番多く関心が寄せられたのは財源でした。ここで正直に僕と僕のNPOの財源について話したいと思えます。2009年津屋崎ランチがはじまりました。その時は国のお金を使って立ち上げました。「ふるさと雇用再生基金」でしたか、国の予算としてあり、それを福津市が津屋崎ランチに活用してくれました。先ほど海士町の商品開発研修生の話をしましたでしたが内容はとてもよく似ていて、「町の良いところをみつけて発信してください」それがテーマでした。

この時はまだ経済活動をしていませんが18ヶ月間、とにかく町のいろいろなところに顔を出しては参加し、自分でやりたい思いを形にすることをひたすらやってきました。予算はそのふるさと雇用機構が100%NPOに出してくれていました。これは行政がもってくれ

ていたのだという認識です。2009年から始まった「ふるさと雇用再生基金」は2011年の4月に終わりました。そこで全く予算が0になったわけではなく、約4分の1ぐらいになりましたが今度は福津市自身が自腹で、ある委託事業を僕達NPOに振ってくれました。今まで国のお金を使っていたものを市が自腹をきる決断をしてくれたことに今も感謝しています。

事業の内容は、「福津暮らしの旅」というタイトルで福津の暮らしを体験する旅のプログラムを作ってくれということです。僕も今年収が半分に減りました。それと並行する形で個人事業をはじめました。NPOは自立を最終的に目指しているのですがそのなかでとにかく個人事業をやってみようと思い、HP作りをこの1年半学んできたので、それをビジネスの一つにしています。それからこのような会議の司会やディレクターなどもしています。もう一つこれからですが子ども達がまちづくりを学べる塾をつくりたいと思っています。あと津屋崎町でゲストハウスをつくることも自主財源確保の一つです。津屋崎には空き家がかなりありそれをすべて改修するのは困難ですが一步一步改修を進めて、泊まる場所を増やし、自主財源につなぐということです。その中の一つの取り組みとして泊まったときに「何をやるんや」という内容作りも委託事業の中に入っています。委託事業も徐々に少なくなっていく予定です。それに反比例して個人事業とゲストハウスで自主財源の収入を増やしていき、2012年の春ごろには全く補助金も無くなり自主財源で自立していくことが今の僕達のプランであり、僕自身の生き方です。

今泉：ありがとうございました。マネージメントというのは非常に重要です。なにか攻めの文化ボランティア活動、そういう印象をもちました。

田中：今度認定NPOの認可が県でも出来るようになりました。これはどういう内容かといえば100人以上から毎年3000円ずつ寄付を集めることで認定NPOという仕組みができます。では、とびうめのようなところも寄付がたくさん入るのかなと思いきや、これは敷居が高いのです。ではどうすればいいのかという話、まったく可能性がないということではありませんが、結局は自分達が一生懸命ボランティア活動をやって、手数料などをいただき出費を抑えることしかないなと思います。会場のみなさんこんなことをしたらNPOが少し豊かになるよ、というような話があればお聞かせいただきたいと思います。

今泉：ありがとうございました。どなたかこういうことをすればお金になるよ。そりゃ自分達の活動だから自分達の会費でやるのが当たり前だというように思えばそれで満足でしょうが、もっといい活動をしたいという理想があれば収益があがるようなことを考えますね。先ほど木村さんが言われたようなことを仕掛けていくにも仕掛け人が必要ですし、その仕掛け人が一生懸命やっても後ろを向いたら誰もついてきていないということにもなりかねません。みなさんの意識が高まらないとなかなか前に進まない形になりますね。よそ

の団体、業種でもいいので、何かご提案があればお願いします。

牟田：宗像市の文化協会・音楽協会の会長をしている牟田と申します。私が宗像市の文化協会に入ったとき、もちろん高齢化しておりましたがいろいろな伝統文化の先生がいらっしやつて、次の世代に伝統文化をどう伝えるかということで市のほうが伝統文化の継承事業というプランをたててくれました。校長先生や教務主任にこういう伝統文化を出前講座することができますよ、と伝えても申し込みがありませんでした。その原因を探っていくと、まず学校の先生が伝統文化自体を知らないのです。伝統文化の先生方はとても長けたものをもっていらっしやいます。先生方のお話は子供たちの耐えられる時間より長くなることもあります。子ども達に要所々々を説明することはとても上手なのです。そこで行政の方と話し合い、そのかた達を活用して今度学校の先生がたに講座を開く企画を始めております。もちろんその事業に対して市はきちんと予算を確保してくれます。このように身近なところでもいろいろな事業ができていく機会はあるのではないかと思います。

ほかに宗像市には高齢者から子ども達まで誰でも2000円で講師をよべるというルックルック講座というものがあります。そこに市民が登録することにより、その方達が財源を得るような形になります。どんどん申込者を増やしていけば講演の場、活躍の場をつくってあげることにもなり、伝統文化継承活動やいろいろな活動も活性化していくのではないかと思います。

今泉：ありがとうございました。お金について、では今村さんお願いします。

今村：私は攻めの文化ボランティアのお話をしたいと思います。例えばお金を稼ぐという話になったとき、どうしても稼げないこともあると思います。このご時勢ですから、そもそも商売のプロでさえ上手いかず倒れていく時代に、ボランティアが稼げるという話自体おかしな話ではないでしょうか。今どうやって活動資金を稼ぐかという相談がボランティアセンターにも沢山あります。稼ぐといっても単に物を売るだけでなく寄付や会費など助成金や補助金も含めていろいろな収入源があると思います。そういう方のご相談を受けた時、私はいつも合言葉のように言いますが、いくら欲しいのですか、いくら必要ですかと聞きます。そうするとほとんどの方が多ければ多いほどと答えます。それは当たり前の話で、100万必要と10万必要とでは稼ぐ方法が全く変わってくるので、やはりいくら必要だということを考えねばならないと思います。そういうところを認識すべきです。

もう一つ、別の意味での攻めのアプローチとは、特に団体の方に言えることですが、例えば運営するための資源は他にもいっぱいあります。お金以外でも人や情報やネットワークなどそれから物もあります。そういったお金以外の資源を十分活かした上で言っているのですかということです。例えばよくあるのが助成金の申請をする時に消耗品代の予算を膨らます、鉛筆や消しゴムなど文房具を買って上げていく方が結構多いのですが、そうい

うものを集めようとしていますか、ということなのですね。例えば研修でこの分野の専門家をよびたいと思うとき、ボランティアで講演してくれるという専門家がいるのに地域のその人には頼まないで遠くからお偉い方をよぶということもあります。要するに身近な自分の周りにいる人や地域の資源をきちんと活かした上で、足りない分をお金という方法でもいいのではないかと僕は思うのです。そういう攻めのアプローチができると、地域の資源を活かし地域と繋がっていくことになると思います。

今泉：そうするとまず、みなさん会員一人一人の趣味特技を整理しておきそれを上手く活かす。エクセルでまとめたらどうですかね。それが文化ボランティア福岡県全体何百人というものすごいリストとなり、この方に今度きてもらおうということで団体を超えてお手伝いに来てもらう、お金が支払えなければ文化ボランティア団体の中での地域通貨も生まれてくるのかも知れません。何か夢が膨らんできますね。

古賀：今のお話を聞いて思ったのですが、例えばお金以外の人・情報・ネットワーク・物というような資源も重要だからそれを求めようと思ったとき、どこにその資源はあるのだろう、どうやって探すのかということもありますね。県ボランティアセンターにいくといろいろ教えてくださると思うのです。あそこの企業がこんなものをもっているよ、ここにアプローチしたら余っているものと欲しい人をマッチングさせるシステムがあることなど、あるいはあなたの団体でも申請できそうな助成金の制度がありますというように相談に乗ってくれると思うのです。しかし文化に関するいろいろな活動や文化ボランティア活動はどこに誰に聞けばいいのか分からない状況かなと今思うのですね。文化ボランティアセンターというのが別にないので、そのセンターみたいなものをつくるという方法もありますが、センター機能みたいなものまでいなくてもそれぞれの団体も持っているノウハウの出し合いをする情報交換の場があるといいのかなと、今すごく思いました。

今泉：そういうのが **facebook** 上でできたらいいですね。そうすると高齢者からなんや **facebook** ってようわからん、インターネットはよう使い切らん、自分の携帯さえよう使い切らん、という方がいるので、携帯の使い方講習会などやるといいですよ。大学生や高校生にきてもらい、一人一人にこういうふうに使えばいいのですよと教えてもらうといいですね。それで写真を撮りメールを送れるようになって孫に送ったら孫が喜んで、それをきっかけにいろいろな事を覚えていく、たった一つ覚えてだけで人命救助に繋がったとかそういう事例もあります。是非そういうところからはじめて若者を中心につくってもらい、それに我々も協力しよう一緒にやろうということです。**facebook** でそういうページをもってもいいのかなという感じがしました。

もう一つ重要なのは、受け入れ側の日々の業務がほんとに忙しいと施設系のところまで出てきたので、施設系の方、どなたか本音をオフレコでも結構です。担当はどれぐらいで変

わるのですかね。忙しいけどこういうふうにやっていますとか何かありませんか？なかなか言えないのかもしれませんが。日々の業務に追われて、年間で5回こういうのを企画しないといけないので大変だ大変だと、でも自分の中で抱え込んでしまってもなにもできないと、外に向けてのものでしょうけど。ではパネリストの方から

今村：ほんとに文化施設だけでなく行政機関自体も大変になっています。ただ一つ考えていただきたいことは、先ほど参加者の中で博物館は非常にお金が掛かるという話がありました。博物館美術館は公営のところが多いと思います、ということは税金が投入されていることになりますね。古賀さんのお話の中に施設側が満足してボランティア側も満足していればそれでいいのではないかとありましたが、そうなったときに、ではその原資を出している即ち税を納めている市民側はどうなのというところがでてくると思うのです。そこで市民の方に文化施設の存在価値を十分理解してもらう事が、施設の存続・発展というキーワードになると思います。例えば最近社会現象として、ひらかれた施設という話が出てきますが、ひらかれた施設になる為にどうすればいいかという話になると、必ず出てくる答えはボランティアなのです。結局は施設側の担当者が忙しいということで、ボランティアに頼らざるを得ない実状もあると思います。そこで文化ボランティアも積極的に参加して大いに自発的な意見を施設側に反映させていくことが、ひらかれた施設となり、ゆくゆくは存続・発展に繋がっていく可能性も十分あると思います。だから担当者も業務で忙しいところがあるかもしれないけど、逆に業務の棚卸しみたいなことをする必要もあるのではないかと思います。ボランティアさんの活動にたいする対応がどうしても二の次になりなかなかまちづくりまではというところがあるかもしれませんが、逆に今求められていることはボランティアの対応の比重を大きくすることだと思います。そう考えるときに、我々は本当にそういう視点に立って業務に当たっているのかどうか少し考えればヒントが浮かぶのではないかという気がします。

今泉：文化施設の中にまちづくり関係の団体が自由に使えるスペースがあって、そこで活動でき、その活動を発表できればいいですね。人が集まる場所に情報が集まり発信できるので、そういう取り組みが必要だと思います。そして文化施設だけでなく町全体が一つの美術館となりホールになるようなそういう仕掛けをやっていく、その為にみなさん方は施設内だけのご案内するのではなく、外でもいろいろな視点でものをみることにより視野が開けると思います。施設の中で案内するとき、これに似たものが外にもありますよというふうに視野を変えていけたらいいという感じがします。それを聞いた人がでは実際そこに行ってみましょうということでその川や山や公園にいかれて、「いやーよかったですねー」それがきっかけで何度か来るうちにそこに住むようになり、団体に入るようになったらいいですね。そういうふうに繋がってくるのかなという感じがします。

それでは最後に一つだけ、こういうことをやるためには一人一人の意識、文化ボランテ

ィアの意識がどう変わらねばならないかということについてパネリストの方、どなたでも結構です。では木村さんどうぞ。

木村：僕は事例発表で未来創造型のボランティアが町を元気にするという発表をさせていただきました。要するに自分のやりたいこと、それから他の人もこうあって欲しいということをもとにして、とにかく最初の一步を踏み出すということをお話しました。行動が人を変えるというところがすごく大きいと思うので、意識を変えたら何かが変わるというわけではなく普通の人が社長になったら言動が社長らしくなるように、肩書きですね。何か一步を踏み出せばそこに必ず新しい世界が広がって、その新しい世界がその人の意識を変えるということだと思います。

今泉：わかりやすくいえばみなさん一人ひとりが田中理事長になり、そして行動するということですね。ありがとうございました。

今村：ボランティア活動は自分以外の人のためにというところがすごく強いですよね。人のため社会のためというところが前提としてありますが、結果的に自分のためにもなっているというところを活動していない人に言っても分かってもらえません。ボランティア活動の全般にいえる事ですがボランティアに入るきっかけはなんでもいいと思います。自分の好きなことでもいいし自分の困っていることでもいいと思います。それが発展してくると仲間のため家族のためということになってくるでしょうし、それがどんどん広がっていけばみんなのため社会のためになってくると思うので、まず自分のやりたいことからでいいと思います。

古賀：文化ボランティアの意識、どのような意識をもっていたらいいかということから意識を変えてもらうためにどうアプローチしたらいいかですが、木村さんの事例発表を聞き音楽散歩の写真もみましたが、若い方や高校生や大学生もいっぱい写っていました。結構年配の方もいらっしゃれば若い方も沢山関わっていてそれは自分でやりたいと言って集まってきたというお話でした。人は楽しいことだと集まってきて巻き込まれてしまうものなので、さっき言われた行動することから意識は変わるということと同じことだと思います。まず意識を変えましょうと言ってお勉強の機会をつくるというやり方もあると思いますが、楽しいことをやって巻き込んでしまうところから意識が変わっていく、その動くところ仕掛ける人が例えば木村さんのような人だったときに、その人の存在やものの考えに衝撃をうけることもあると思うのです。それがきっかけになって関わり方が変わり意識を変えていくことに繋がる部分もあるのかなと思います、何か楽しい仕掛けを考えていく、そこが大事なのではないかという気がしました。

今泉：楽しい仕掛けですね。笑顔を売る笑売人ですね。では田中さん。

田中：今楽しい仕掛けという話がでましたが、私達はアクロスでの活動時、ボランティア活動に参加した人に、例えばもぎりの仕事が終わった後に会場の中に入って音楽をきいてもらうようにしています。もともと音楽好きな人がボランティア活動に手をあげていますしチケットを買ってまで行きづらい、活動に参加することにより演奏会の一部でも聞けるという仕掛けの一つで大事なことだと思っています。しかし自ら入るのは躊躇しますから私から声をかけて、今から中に入って聴いてみませんかと促します。これはアクロスの好意で聴かせてもらっています。ボランティア活動しているイベントの中で楽しさをボランティア自身が頂くというそのような仕掛けもあります。

今泉：ありがとうございます。楽しみにしているのですね。楽しむとやはり表情が柔らかくなりますね。その表情につられてみんなまた参加するというようなそういうことでしょうか。心儲けを是非していただきたいですね。残り時間が限られてきました。そろそろまとめに入りたいと思います。まず今日ここに参加されての感想などありましたらどなたでも結構です。「俺は一言いわんと帰れん」という方、是非一言。最後はパネリストのかたの感想でまとめて終わりたいと思います。

宮地：私も高齢者の一人です。高齢化で世代交代の云々という話がありましたが齢を重ねている方もいろいろノウハウをお持ちだと思うので、その辺も活用していただき若い方にも伝わればいいなと感じました。

今泉：ありがとうございます。そうですね。今はノウハウを沢山持っている熟年社会で、じいさんばあさんのノウハウを活用すること、これを『磁場』の力といいます。産業でいう「地場産業」ですね。頑張りましょう。他に何かありませんか。ではパネリストの方から一言ずつ感想をいただいて最後に総括したいと思います。

田中：主催者の一人として申し上げますが、今日皆さんを拝見していると、お顔も和やかで、非常に生き生きとした様子でした。

私、まちづくりと文化ボランティアはどういう接点があるのだろうと、このフォーラムを企画する途中からずいぶん悩みましたが、皆さまに盛り上げて頂き大変うれしく思います。ありがとうございます。

木村：皆さま長い間お疲れ様でした。先ほどの分科会では突然皆さんに、今まで聞いていたことについての思いを話してくださいと促し、はじめと惑わせてしまいました。しかし最後にいろいろ話した感想や思いを用紙に書いてくださいとおねがいたところ、全部で